



随

想

古本を探す

原 政 夫

バルザックの翻訳を収集することを思い立ったのは今から五年前である。日本語訳のほか、ドイツ語訳、ロシア語訳、英訳などを集めているが、外国の訳本は日本の古本屋で探してもむだである。そのほうは外国書輸入店に任しておくより仕方ない。

私が直接古本屋であるのはもっぱら日本語訳本だ。

さてバルザックの邦訳収集であるが、まず第一のハンディキャップは私が京都に住んでいることである。京都の古本屋は数も少ないし、またそのほとんどが小さく貧相で、さらに西洋文学書の出物はきわめて少ない。京都にいながらにしてバルザック文献を集めようとするのは、まさに「木に縁りて魚を求む」の類だ。

だから旅に出なければならぬ。探書旅行である。幸い旅は好きだから具合がよい。コマーシャルふうにいえば、趣味と実益を兼ねた旅行ということになる。買った本には、蔵書印の代わりに、入手した日付、書店名、地名、ついでに値段まで書きつけておくことにしているが、その地名を見ると、秋田から熊本まで全国各地にわたっており、われながらよく歩いたものだ、と感心している。

地方にも、大きな古本屋のある町はある。すなわち、静岡、岡山、福山、広島、小倉、長崎などである。逆に、旧帝大所在地で地方の中心都市でありながら、古本屋・

新刊書店ともに貧寒なところもある。東では仙台がそうであり、西の横綱は福岡市だ。大学と県庁があるのに古本屋が一軒もない、というけしからん町（水戸市）さえある。

だが何といても古本探しは東京に限る。いったい東京には何軒の古本屋があるのか、正確な数は知らぬが、とにかく多なこと目をむくばかりだ。東京以外の全日本の古本屋が束になつてかかって、さか立ちしたところで、東京の古本屋には太刀うちできない。当然、私の探書旅行は東京中心となる。年に三回、一回につき四泊ないし六泊——これがここ数年來の私の東京出張の実績。東京では、神田、戸塚、中央線沿線、それに世田谷を加えて、一日のうちには百軒から百五十軒ぐらいの古本屋をあさる。一日に百五十軒も古本屋まわりをした場合、肉体と精神がどのような状態を呈するか、ちよつとご想像願いたい。文字通り、足は棒となり、目はかすみ、のどはカララとなる。それでも、両手にズシリと持ちごたえのあるほど収穫があったときはよい。問題は収穫がなかったときである。

そういうときには、屈託のない顔つきの群集のなかを、埃をかぶって歩きまわっている自分が、レーベンとはかわりのないところで、ひとりむなしい営みをしているような気がしてならないのである。

「ねえ、君、あらゆる理論は灰色で、

緑なのは生命の黄金の樹だ」というメフイスーフエレスの有名なセリフが耳に聞てえてくる。帰りの国電の窓から見える渋谷か新宿あたりのネオンの海のなかに沈没してしまいたい衝動にかられるのも、そういうときである。

× × ×

「明治・大正・昭和 翻訳文学目録」（国立国会図書館編）という便利な本を私は持っている。照合してみると、私のバルザック邦訳文献収集はほぼ九割まで達成されている。余すところ十分の一。だが十分の一の壁は分厚く、がんとして聳え立っているようだ。

（経済学部教授・フランス語）

入学当時

井 口 海 仙

私が、同志社普通部に入学したのは、今からちょうど五十年前になる。

日蓮宗の熱心な信者だった養父は、私がキリスト教の学校をえらんだことに、不満だったようだが、常々「新島先生はえらい人だ。」と口にしていたてまえ、いざとなつては反対も出来ないと思つたのか、入学式には、自分からすすんで、ついて来てくれた。

私は、つっぱの紺かすりに、小倉の袴をはいていたが、養父は、黒紋付の仙台平の袴をつけ、めずらしく靴をはき山高帽子をかぶっていた。

私たちは、時計台の前の、大きな木の下で、式が始まるのを待つていた。その木の下には、私たちと同じように、式を待つ人たちが大勢いたが、その中でも山高帽子をかぶった養父の姿は、群をぬいて、リッパ

に見えた。

入学式は、チャペルで行なわれた。もう記憶がうすらいているが、やはり讃美歌や聖書朗読、祈禱などが、型どおりあったように思う。壇上には、先生方が、ずらりと並んでいられた。紋付の羽織に袴をつけ、口ひげをはやした先生が、中央にいられたが、校長の波多野先生であることは、後になって知つたのだが、訓辞の時立たれると、背が高く、左か右の口元を少しゆがめて、抑揚のない声で、新島精神を、諄諄と述べられた。私には、それがよくわからなかったが、養父は、一言一言うなずきながら熱心に聞いていたようである。

最期に宣誓書に署名して、チャペルを出たのだが、それからすぐ家に帰つたのか、教科書を買に行つたのか、はっきり覚えていないが、このようにして、とにかく同志社普通部の生徒となり、翌日から通学することになったのである。

一年B組が、私の教室であつたが、担任は英語の浅野先生。度の強い近視の眼鏡越しに、ジロリとにらまれるのが怖かった。楽しみだったのは、牧野先生の漢文、三輪

先生の国語の時間であつた。とくに三輪先生には、学校を出てからも、いろいろと教えていただいたことが多い。

学校を出てからは、同志社を訪ずれる機会もすくなくなつたが、それでも、同志社の外を通ることがあると、時計台の前の大きな木が、今でもものこっているだろうかとのぞいてみることもある。そしてそのたびに、山高帽子をかぶつた養父や、山羊ひげの牧野先生らの姿が、思い出されてくるのである。

(校友・今日庵理事)

海の色

岡 道 男

青海原というごとくふつう海の色は青いものときまつているようであるが、幼少の頃を中国で過した私などは海は黄色いものと思つていた。毎年夏になると海水浴に連れて行つて貰う海岸から見た黄海が文字通り泥で真黄色であつたからである。初めて

青い海を見たのは十二、三才の頃日本へ戻る途中であつたが、私たちの乗つた船が黄海から東支那海へ進んで行くとき、黄色い海と青い海とが実に鮮やかにくつきりと一線で分けられていたことを今でもありありと憶えている。あのように海の黄色と青とが交わることもなく分けられているのは海流のせいであろうか。

大学に進んでギリシア・ラテン語を専門に学ぶようになってから、やがてホメロスの詩に親しむことになった。ギリシアはわが国のように山地が多く、海に向つて開かれていた国であり、ホメロスの詩にも海がしばしば登場する。この詩には枕言葉のような形容詞が名詞とともに使われているが、海にも多くの枕言葉がある。その中で「ぶどう酒色の」というのがあり、口調がよいのでいつも口ずさんでいる中に、何とはなくギリシアの海はぶどう酒の色をしているに違いないと思ひ込んできました。少なくとも黄色い海がある以上、ぶどう酒色の海があつても別に不思議ではなかったからである。

その中に欧州に留学する機会に恵まれ、

ある年の春休みに念願のギリシアを尋ねることができた。しかしギリシアの海は、幾分色は浅いがやはり青色であり、想像していたようなぶどう酒ではなかつたので大変失望した。ところがクレータ島を訪れた帰途、夕方西の海が一面に紫紅色で染まっているのを見て、それが「ぶどう酒色の」海であることに気付いたのである。そしてそれが単なる詩的想像でないことを知つたが、考えて見れば、昔のギリシア人にとつては詩とはおよそ縁遠いものであつた。彼らの船は帆と櫂を用いたが、夕方風になると夜の闇をのがれるために懸命に櫂で漕がねばならなかつた。したがつてその時刻の「ぶどう酒色の」海がとくに印度に残つたのだろう。他方ぶどう酒は彼らの日常の生活に欠かすことのできぬものであつた。

海にはさらに「不毛な」という枕言葉がある。「オデュッセイア」では主人公たちが嵐のために無人島で足どめをくい、飢えに堪えかねて遂に神牛を食べたことが語られている。海の幸に慣れている私たちから見れば、魚や貝や海草で充分飢えをしのぐことができそうに思う。しかし実際にギリ

シアの海や地中海の海岸で貝殻や海藻のついた岩など全く見かけなかった。したがって魚類なども豊富ではないのであろう。海の水までさらした感じのするギリシアの海を見て、それを「不毛な」と名づけた理由がはじめて分ったのである。少なくとも古代のギリシア人にとって海は単なる交通路であり、私たちのようにそこから生活の糧を求める場所ではなかったのである。このようなことは本に書いてあることかも知れぬが、実際に目で見、手でふれることほど確かなことはないだろう。しかしそれからというものにはホメロスを読むとき、「ぶどう酒色の」海が以前の詩的な美しさを幾分失ったこともまた事実である。

(法学部助教授・ギリシア文学)

図書館と私

加藤 三郎

「こちらにおつとめですか」「図書館です」「本が読めていいですね」「どうして図書館

に」などという会話を何度かくりかえしているうちに六年という歳月が過ぎてしまった。

「図書館」——こう聞くと各人各様のイメージを描くようだが、図書館の実際を知っておる人は案外少ない。素人目には、利用者へ本を貸し出して、あとはゆつくり本を読んでいるという結構な生活とつづる場合が多いようである。たしかに一時代前までは、こういう風潮があったらしい。だから、図書館員といえば、本の好きな人とかお年寄がなるものと大体相場がきまっていた。

しかし、戦後は様相が一変し、ただ本が好きだからといったきわめて単純な理由は、あまり通用しなくなった。数ある図書館のなかでも、いわゆる公共図書館ともなると、今日では社会教育の一施設であるとともに、その地域社会における代表的文化施設ともなっている。それゆえ、まず司書である前に社会教育者、文化活動家であることが要求される。したがって、こういう点に十分な関心と理解を有する人でなければ、本当の図書館員(司書)と呼ばれる資格はなからう。このようなところから現代

の図書館を定義するなら、地域社会の住民に読書と読書の間を提供し、市民文化の向上、発展をはかるところと言えよう。

ところで自分と図書館を結びつけたものはというと、同志社の大先輩でわが国の代表的図書館学者として知られる竹林熊彦先生との出会いからはじまる。先生の人格、学識を通し図書館にひかれたことは勿論、先生が開拓された図書館史研究に新しい目を開かせられたことに由る。先生の講義は、学生時代に聴いた講義のうちでもユニークで、しかも魅力あるものの一つだった。致遠館などでの講義は未だに忘れることが出来ない。

先生は実際に図書館で仕事をされながら、すぐれた業績を残しておられるが、図書館学関係の処女作は、昭和八年二月大阪の間宮書店から刊行された『図書目録綱要』(W・W・ビショップ著という訳書で、これに現在京都市立美術大学教授である重久篤太郎先生が跋文を寄せておられる。これから亡くなれるまでいくつかの著書を公けにされておるが、先生の最後の著作となつたのは、昭和三十三年五月に刊行された

『図書館物語』で、これの奥付の上に「著者自伝」を書いておられるが、如何にも竹林先生らしい書きぶりこの本を手にするたびに感心している。短文ながら実によく先生ご自身を表現されていると思う。

竹林先生の影響を多分にうけた自分にとって、図書館史は恰好の研究テーマとなり、折をみては当地方の図書館史をまとめているが、一昨年（三十八年）の十月勤務先の図書館が開館四十年を迎え、これを記念し館史の編集が計画され、この仕事を担当することになった。そして昨年の正月『鶴舞図書館四十年史』（A5判 一四〇頁）として誕生したわけだが、これが国立国会図書館の『納本週報』に掲載されるや各地の図書館から寄贈依頼があり、すっかり品切れになった今日でもアメリカのC大学図書館などからも寄贈依頼状が届いている。

ささやかな館史ではあるが、自分にとっては図書館学に関するまとまった処女作となり、また館は昨年の四月、館名が名古屋市鶴舞中央図書館と改称されたが、旧名鶴舞図書館を記念するものとなったのである。（校友・名古屋市鶴舞中央図書館司書）

野の百合

徳永清行

経済は成長したけれども、景気は良くないそうにもない。このような当今ではあるが、わが国の保有外貨は久し振りに二〇億ドルを超えたと伝える。この数字には検討を要する。数学で考え、数字で語ることば極めて望ましいことでもあるとしても、それには前提が必要である。数字そのものが正確であるとともに、判定が確実であることが取上げられねばならない。このような心構えから、理を明らかにすることができたとしても、次にはその理を用うことは容易ではない。

同志社学園を慕って、全国から笈を負うて集る青年男女の数はニュースとして伝えられる外形を内輪にみても、逐年増大していることはたしかである。身近かに起った数例を取上げるのでは、大数の法則を示すことにはなりがたいであろうが、ここには

湖北行

田中順二

（女子大教授・国文学）

湖の岸おほらかに曲りゐる一部が見えてなべて枯草

セロファン紙からまりて冬の風に鳴る古き街道の軒並あはれ

たかだかと夕かがよひのうすれむとして網干せるひと村を過ぐ

どの家も家裏見せて石段のさびしき冬の対岸が見ゆ

何か混乱したところがありそうである。はるばる堅い決意で、この学園で学んでいるものが、入学当初の意気込みを失い、なかには適帰するところをあやまち、上級学年に進むにつれ、ただ押し流されるように卒業するのではないかと訴えを耳にするからである。もちろん本人の努力次第で周囲の事情にかかわらず、初一念を貫徹することとは、必ずしも不可能ではない。しかし学園の立場からすれば、希望や期待に副えるようなあり方に一段の留意を払うべきであろうこともいうを俟つまい。わが国の現状では、名ある外国の大学と比べて、施設において劣り、または私学としての本領の發揮に欠けているのは、やむを得ないとしても、それはそれなりに、進路を開きたいものである。

ある日曜、雨が降っていた静かな朝、神学館で一卒業生の結婚式が行なわれた。同志社が学園として持つ環境は、決して劣ったものではないようにしみじみと感じた。そのころ機会を得て、松下幸之助氏の講演を聞いた。同氏と懇意なアメリカの第一流電機会社の社長との対話が織り込まれてい

たので、強く記憶に残る。その一齣によれば、世界で一番良い都会、それは別荘を持つに最高という意味での都会を求めてみれば、先ず北京だろうが、現在、北京に直ぐ住めるわけのものではないから、次位のものとするならば、京都であろうというのであった。そういう見方から、京都で一番環境のよろしい地点を探すとなれば、御所の一帯ということにもなろう。同志社の位置するところは大変に恵まれているともいえる。八十五周年の記念祝典に故徳富峯翁がチャペルで諄々と話されたのは印象的であった。慶応の福沢、早稲田の大隈、同志社の新島と、三学祖を比較し、新島先生をもつ同志社を祝福された述懐は人々の心を打ったはずである。

同志社の将来は施設や機構にかかるところも固より多いけれども、かりにそのようなことを措くとしても、同志社学園はそれ自体のよりどころで精進できるはずである。先日、高田保馬先生にお目にかかった時、「小さきは小さきままに花咲きぬ、野辺の小草の安けさを見よ」との作歌を拝見した。マタイ伝(六・二八)の心でしようと

榛の木を巻きて積みたる稲藁に冬の日ざしはかげりはじめつ

いまだ咲かぬ水仙といへどゆきすりの納屋の裏べの土はひそけし

湖に向ひて光る幾筋の水おのづから涸れたるらしも

いつべより落ちくる風か絶え間なく湖のうねりの上を薙ぎゆく

すでに日の射さぬ山裾のひと村が見えをり午後三時過ぎしころほひ

湖岸より吹きくる風は止む時もなく暖房の室あたたかし

語っていられたが、榮華をきわめたソロモンのたとえをわたくしなりに偲んでいる。

(商学部教授・貿易論)

音楽と私

林 恒 男

ハイファイマニアという人たちがいる。

彼らのレコードの再生音に対する注文は、極めてきびしい。二十から二万サイクルまでの周波数が忠実に再現する装置をもっていることを誇っている人もいる。演奏会にオーケストラをききに行つて、「高音と低音がよく出ている!!」と思わず叫んだ人があるそうだ。

最近のレコード・テープ・再生装置の技術的進歩は実に目覚ましいが、レコード音楽はそれがどんなに高忠実度で再生されても、しょせん「カンヅメ音楽」である。

「生の音楽」にはまだ一步の隔りがあるのが現状だ。しかし、録音された音楽が「カ

ンヅメ音楽だ」の限界をもつにしても、現在の技術的進歩の段階からすれば下手な演奏の生の音楽よりも、良い演奏のカンヅメ音楽の方が音楽として優秀だといえるのではないだろうか。何といつても、レコードで世界の一流の名演奏家による音楽を、茶の間でいながらにして味わえる楽しみは大きい。特にラジオのFM放送で音質の良い音楽をふんだんにきけるようになったことは、音楽の好きな私にとつては何よりもうれしいことだ。

こどもの頃、父がドイツから初期の蓄音機とレコードを買つて帰つた。当時のレコードは電気吹込み以前で、厚くて重いレコードの片面にだけ録音されたものが多かった。歌手ではカルーソーやシューマン・ハインクラ、バイオリンではエルマン、クライスラーらの当時の名演奏家の吹込みだったが、あたら名曲の名演奏もザザという針の雑音で消されがちな情ない音質だった。レコードをききながら、父が話してくれたのがグリークの「ペールギュント」だったと知つたのは私が中学生になつてからだつた。中学の上級生になつた頃から、クラシ

ックのレコードを熱心にきき、集め始めた。やがて戦争が始つた。ベートーヴェン、モーツアルト、バッハと曲目は變つたが、病氣のため兵役を免かれた私は、静養中、本とレコードを片時も離さなかった。空襲警報が鳴ると、電燈を消してベートーヴェンの後期の弦楽四重奏のレコードにききいつた。音楽は心の糧だという実感をもつた。その頃、カペーとブッシュの演奏の優劣を論じた友人は戦地から再び帰つて来なかった。

戦後初めてきいたLPのきれいな音質は今も強く印象に残っている。針の雑音がほとんどしない明澄な音質。LPの出現はレコードの革命的な進歩だと思つた。外人演奏家の来日も盛んになり演奏会にもよく通つた。メニューヒンやブタペスト四重奏の美しい音は今も耳に残っている。やがてラジオのFM放送が開始された。その音質の向上は驚異的だった。SPからLPへ、AMからFMへの発達は音質を飛躍的に改良したわけだ。

弦楽器の魅力にとりつかれて、むかし独習したチェロはこの数年押入の中ではこり

をかぶっている。腕は一向に上達しないのに、耳だけが肥えて(う)自分で演奏する音楽は鑑賞に耐えないのだ。しかし、下手は下手ながらも楽器をひく独特の楽しさ、特に合奏の格別の楽しさは十分味わったし、その経験が音楽鑑賞に大きく役立っていることで満足している。音楽愛好者として演奏派から鑑賞派に転向して久しくなるわけだ。レコードマニアではなくて、音楽愛好者をもって任じている私は、もっぱらFM放送で音楽を楽しんでいる今日この頃である。

(経済学部助教授・英書)

わが家の歩み

竹 村 修

間借りと引越しほどつらいものはないと痛感した。痛感すると馬力が出るもので、妻と力を合せて土地の土工さんに頼んで大原の地に小さな家を建ててもらい、移り住んで三年。買ひ物は私が引受けて勤め帰り

に買う。家は建ったが周囲は竹と雑草が茂り、人の住んでいそうな家ではなく、夏にはブユと蚊が家の中まで這入って来るので窓に網を張りつける。整地もした。人を頼むと金がかかるから一人でぼつぼつやった。冬は井戸が涸れて山水を汲みに行った。妻は町の家と同じだけの便利さを希望するが、さてとなると時間に追われ、労働力が不足する。勤めを終えてから一〇〇Wの照明燈をつけて夜の十時頃まで頑張った。連日続けると疲れが溜る。明日の勤めもある。こうして勤めと家庭の間から一歩も出られない生活が続けた。そうこうしている間に二人共この地に慣れ、体力だけではきて来た。最初苦になった買ひ物も楽しくなり、整地の苦しみも土いじりの楽しみに変わり、野菜や花造りの明るい世界が生れた。土地に慣れるに従って余裕が生れ、気になったこと、頭にこびりついていたり、形を変えて楽しい思い出になって行くようになった。かくれていた慾望が満たされ、家庭の根拠地が出来上った喜びに浸り、満足を得たからであらう。

最初の満足を得ると疲れが出る。妻が日

々の買ひ物が出来ないほど淋しいものはない。話し合える人がいない、子供の教育は町の学校へ、もうひと部屋欲しい、等々と、私も本を読む時間が欲しい、経験の豊かな人の話を聞きに行きたい、と満たされぬものに心が向うようになった。どうにかわが家も普通並みになって来たようだ。国が人づくりを目標に打ち出した。わが家も遅れてはならぬと人づくりにのり出した。私が観念的な目標を打ち出すと、妻がなじる。二人の意見は常に合わないが、いつの間にかよりよい方法を見つけ出して一致する。間違っていたということも多い。どうやらほんとうの厳しさが欠けているようだ。下手に厳しくするとにせものになること請け合ひである。頼りない浮草のような存在の家庭であるが、ただ隠れているお人好しの善意と、どうしてもよりよい家庭を築いて行くのだとの意志だけがわが家を支えているようだ。

(大学職員)